2023年12月17日

アドベント第3週礼拝説教要約

キリストの誕生の次第

（マタイ1・18～25）

一、キリストの誕生をめぐって

マタイの福音書の興味深いところは、イエス・キリストの母となったマリアと、父となったヨセフが、それぞれにガリラヤのナザレ出身であることが書かれていないことです。2章23節になって、ようやく**〈そして、ナザレという町に行って住んだ。……〉**と出てまいります。マタイの関心は、キリストであるイエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムで生まれたことにあったのでしょうか。それが、可能性としては一番高いかも知れません。

二、神と人との協働のわざ

ノアは正しい人でした。ですがノアの正しさは、完全無欠な正しさではなく、主の御意思に自らの意思でお従いしたい、という正しさでした。新約的な表現で言うなら、ノアは「聖霊に満たされ」ていました。そのノアは、大洪水による神のさばきが終わった後、農夫となり、ぶどう畑を作りました。そしてぶどう酒を作り、酔っ払って醜態をさらしてしまいました。

「協働」ということばがあります。二人以上が協力して働くことです。神がことをなさる時は、人間と協働してことを行われます。第二神殿の再建工事が、敵の妨害により15年間中断してしまった際、主は預言者ハガイやゼカリヤを通して語りかけられましたが、実際に奮い立ち、指揮したのは総督ゼルバベルでした。こうして見ますと、神は人と協働してことを行われることが多いように思われます。そういう目で、きょう開いたテキストを見ていただきたいです。18節です。**〈イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。〉**とあります。**〈聖霊によって身ごもっていることが分かった〉**とありますが、主語はだれでしょうか。**〈母マリア〉**です。マリアは、御使いガブリエルをとおして語られた主の御意思を受け入れました。ですから、自分が身ごもっていることが分かったとき、それが聖霊によるものであると知ったわけです。マリアはその事実を、婚約者のヨセフに話しました。それは書かれていないので、行間を読むことになります。すると19節です。**〈夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った。〉**とあります。もしマリアが、自分が身ごもったいきさつをヨセフに話したとするなら、ヨセフはマリアの言うことを信じなかったことになります。当然と言えば当然です。なお、ここに**〈ヨセフは正しい人で〉**とありますが、この場合の「正しい」は、ノアが正しい人であったと同じ意味です。ヨセフが完璧な人間であったのではなく、自分から主の御意思にお従いしたいと心底願う人だったという意味です。なお、当時のユダヤ社会における婚約は、一緒に生活することはまだ始まっていないものの、二人は夫婦に近い関係でした。ヨセフとしては、姦淫の罪を犯した女性とは一緒になることができませんでした。かと言って離縁すれば、町の人々は「ヨセフはマリアを孕ませておきながら、離縁するとは何事か」となりますし、マリアが姦淫して身ごもったと言ってしまえば、マリアは殺されるかも知れません。非常に悩み、**〈ひそかに離縁しようと思った〉**ようです。するとヨセフは夢を見ました。よほど気になっていたのでありましょう。20節、21節です。**〈1・20～21〉**　こうして、ヨセフは主の御意思を知りました。ですが、これで問題が解決したわけではありません。ヨセフは主の使いを通して示された神の御意思に従うこともできたし、従わないこともできました。主にお従いすることもできますし、主の御意思にお従いしないこともできるわけです。これはヨセフにとって、また人類にとって重大な時でした。ヨセフはどうしたでしょうか。24節、25節です。**〈1・24～25〉**ヨセフは自らの意思で主の御意思にお従いしました。ちなみに、ここに書かれていることは、ヨセフ自身の証言から書き記され、それがマタイによって採用されたのでありましょう。その出来事を知って、マタイは「預言の成就」と見たわけです。22節、23節です。**〈1・22～23〉**

三、心で決めたとおりに

神のわざは、人との協働、すなわち力を合わせて働くことによって進められて行きます。ノアにしても、モーセにしても、ゼルバベルにしても、マリアにしても、ヨセフにしても、そして主イエスにおかれても、それぞれに自分の意思を働かせて、神にお従いした器でした。

今回のテキストを通して、これをマリアごと、ヨセフごととして読み終えてしまったら空しいです。ぜひ自分ごととして受け取っていただきたいです。そのためには、どうしたらよいのでしょうか。私は、第二コリント9章7節の**〈一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。〉**の聖句がぴったりだと考えます。心で決めたとおりに献げるのです。あるいは奉仕するのです。そうするなら、自分の決断と奉仕により、神のわざが進んで行きます。